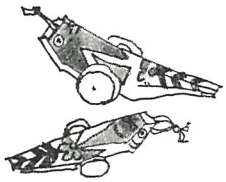
デプリベーション

堀内治世



1

心理学でよく使われる言葉に、deprivation 剝奪という言葉がある。これは、すでに持っているものが剝奪されたり、また、当然受けるべきものが阻止される時の個体内の欠損状態一般に対して名づけられたものであるが、例えば、赤ん坊が何らかの事情で母親から隔離され、充分な愛情と保育を受けられない時、これをマターナルデプリベーションと言う。そして、この状態が長く続くと、その子供は、いわゆるホスピタリズム（施設病）とよばれる神経症的症候を示すようになる。ミネソタ大学の心理学研究室で行なわれた食物のデプリベーションの実験では、半飢餓状態に長くおかれた被験者は、もはや食物に関すること以外には何も考える気をなくしてしまった。ある人は、自分がコック長になったことを夢想し、ある人は、盗んでも仕方のないフライパンや鍋を台所から盗み出した。もっとひどい例では、食物の幻視がみられたと報告されている。このような食物への強い関心は、実験終了後も被験者となった人々の内に強く固着して、正常状態に戻るのに三ヵ月を要したと言われる。

また、別の心理学者による実験では、栄養摂取量のデプリベーションによって生じる実験神経症の観察が報告されている。日常、三、四九二カロリーの食物摂取をしている正常男子三二名が、厳格な実験統計によって、毎日一、五七〇カロリー以下の食生活を半年間余儀なくさせられたところ、全員体重の¼減少と共に、情緒面で著しい障碍を示した。これらの人々は、実験終了後再び元の食生活に戻ったが、彼らの神経症的症候は、数ヵ月も消えなかったことが報告されている。

ところであの悲惨な大東亜戦争は、われわれ日本人をして何らかの面におけるデプリベーションの体験者とならしめたといえよう。私もその一人として、苦い思い出はいまなお生々しくよみがえって来るのである。

2

終戦当時、私は木材商を営む両親と共に大連に住んでいた。この町は、満洲の玄関口とも言われ、終戦の半月前までは、内地の人々が想像もつかないほど物質的にも比較的恵まれ、平和の町大連は、八月九日、ソ連の突然の戦争参加布告のため、一日にして恐怖の町と化したのである。戒厳令が町中に布かれ、銃後に残っていたごく少数の男の人たちが、ひそひそと集まってはソ連兵侵入のばあ

いの在連日本人のとるべき手段について話し合っていた。私の父も、毎日のようにどこかに出かけては、深刻な表情で帰宅した。その頃の私は、まだうら若い乙女であったから、大人たちがささやいている婦女子の暴行などという言葉もピンとこなかったけれども、しかしとにかく緊迫したふんいきの中で、何も手につかない状態であった。ずっと後になってから父から聞いた話では、大人たちは、ソ連兵が攻めて来たなら、われわれに勝目のないことは火を見るより明らかであるから、潔ぎよく重要書類に火をつけ、青酸カリを紅茶にでも入れて一家自決をしようと覚悟していたそうである。ところが、予期以上に戦争終結の日が早くやって来た、ソ連兵と一戦を交える覚悟でいた私共は、何か肩すかしを食ったような名状し難い妙な気分におとし入れられた。八月二十二日に占領軍が進駐してくるまでの一週間というものは、嵐の前の静けさというか全くなすことを知らぬ無気味なまでのブランクの日々であった。敗戦などという経験をしたことのない日本人にとっては、今後何が起こるのか全く見透しが立たなかったことは、むしろ当然であろう。父は万一に備えて、私のために近くの親日家の満人の家に支那服を借りに出かけた。当時、大連一中の生徒だった弟は、ラジオを通して終戦の詔勅を聞くと「畜生！」と叫んで大きな穴があくほど強く壁にげんこつをたたきつけた。ただ母だけは、少しもあわてず、詔勅を聞き終るや、「これでまた美味しいシュークリームを食べられる日が来るわ」と言った。この母の言葉は、恐らく一生忘れることができないだろう。母が、子供たちが不安におびえないようにわざとこんなことを言ったのではないことは、母の性質を知っている私には一番よく分っている。この言葉は、全く母の自然の感想としてもれたのであったが、正直なところ私は内心ほっと救われたような気がした。

3

八月二十二日、ソ連兵がいよいよ進駐してきた。そして予想以上の大混乱が始まったのである。ソ連兵は、昼夜を問わず日本人の家を荒しては、目ぼしいものを略奪して行った。しかしこうした財産の略奪にもまして、恐しい婦女子への暴行が市民をふるえ上がらせた。ことに私共は、大連の郊外夏家河子という避暑地に住んでいたため、その被害は大きかった。町の中は銃声、怒号、悲鳴などが錯綜した。私は姑娘（くにゃん）に変装どころではなくなった。近くの散髪屋の小父さんが、バリカンを持って娘のいる家を片っぱしからとび廻って、髪を切り落としていった。弟の学生服を着たくりくり坊主の私は、日本人にさえ見分けがつかないほどの美少年（？）になり変った。ところが、この安心も束の間、日本婦女子の変装をかぎつけて怒り狂ったソ連兵たちは、今度は血まなこになって年頃の青年のいる家の戸をたたきはじめたのである。最初の私共の隠れ家であった天井裏や屋根裏は、ソ連兵の手先になっていた満人の密告のために、危険になったので、最後の手段で縁の下に隠れることにした。縁の下といっても、よく日本の古い家の台所で炭など保存するためにあるあのような大きな場所ではない。丁度、汲みとり口のような小さな穴が縁の下にあいていて、私は、その穴ぐらへ体を仰向けにしながら足の方から入って行った。床の高さは、およそ八〇センチほどしかないので、もちろん体をおこすこともできなければ、土の上に毛布を敷いたけれども石がごろごろして

いるので眠ることもできない。陽の光は全く遮断されて何も見えない。夜になると、父がしっこくたづねて来るソ連兵の目を盗んで、母の作ったおにぎりとおかずを差し入れてくる。その時五、六秒ほど外の空気を吸う以外は全く一切外界からシャットアウトされてしまった。後に心理学を学ぶにいたって、私は、あゝあれこそ知覚と睡眠のデプリベーションの好例だったなと思ったことである。差し入れのおにぎりは、軽うじて嗅覚のデプリベーションだけは阻止してくれたとはいえ、色も形も見ることのできない食物が如何に味気ないものであるかということを効めて体験した。縁の下に比べると陽の光のさし込む天井裏などは、全く御殿であった。こんな異常事態での五日目の日、ついに私は耐えられなくなった。ただもう物を見たい、体を動かしたい、声を出したいと考える以外、思考の能力を完全に失っていた。今思えば、発狂の一歩手前であったようである。父が弁当を持って来た時、私は父が泣くようにしてなだめすかすのも聞かず戸外へとび出した。そして懐しいわが家に入ると、放心したように坐り込んだ。父と母は驚きあわてたが、結局このまま再びあの縁の下に隠すことは不可能なことだということになり、再び天井裏の住人となることができた。

4

その後しばらく経ってから、四十七年間も私の家で忠実に働いてくれた満人のボーイの案で、彼に護られながらソ連兵の目をくらまし、大連キリスト教会の牧師館の天井裏に移り住むことになった。この教会には、今も八十歳の御高齢で東京の敷島教会の名誉牧師として御健在の校友、磯部敏郎先生御一家が住んでおられたが、そこに堂守りをしていた婦人が非常にエキゾチックな顔をしていて、面白いことにその人が教会の玄関に現われると、いきり立ってやって来たソ連兵はすごすごと引き返して行くのであった。その婦人のお蔭で、牧師さんのお二人のお嬢さんはいつも無事であるという情報をボーイが聞き込んで来たのである。恐らく、ソ連兵たちは、彼女をアメリカ人だと思い、その筋からアメリカ人には決して立ち向うなという強いお達しを受けていたからであろう。

5

こうして、私は、図らずも磯部先生御一家と起居を共にするようになった。その後、治安が回復するまで、私の両親や弟妹も教会に移り住むようになったのである。まことに困窮な日々ではあったが、平和な時代と寸分変らない磯部先生の信仰と慈愛に満ちあふれた暖かいまなざしは、私共のすさんだ心をどれだけいやして下さったかわからない。

昭和二十二年三月、ようやく私どもは着のみ着のまま、懐しい母国へ帰国することになった。私があの最大の知覚のデプリベーションの経験にもかかわらず、どうやら無事に帰国できた。もっとも帰国後しばらくは手紙を書こうとしても文字を全然忘れていたり、まとまった文章が書けなかったり、人と会談していても何か空虚で、正常な状態に適応するまでに一年あまりを要した。

私がうけたこのデプリベーションの特殊経験は、戦争という悲惨な異常事態がもたらした産物であったといえよう。

（文学部助教授・臨床心理学）